神田学館へ学生実力行使

研連幹事会議決議に呼応

29日 約百人が乱入、解放、集会

昨秋十月九日の全学ロック・アウト以来、神田地区の新・旧両学生会館は封鎖中であったが、六月二十九日、研究部連合会を中心とする約六〇人の学生は、旧学館の入口からドアをけ破り侵入、新学館へも入った。学生は学館内、広場で集会を開いたが、午後九時ごろ解散した。そのため一時的にしか学館を解除できなかったが、神田の学館に対して学生が実力行使したのは一〇・九のロック・アウト以来初めてである。しかしながら当局は、これら学生の行動に警戒心を強めており、これからの学館封鎖解除は微妙なものとなりそうである。（写真は新・旧学生会館を解放した後、新館正面入口で気勢をあげる学生達）

二十九日午後五時から、研連の呼びかけで「学館解放・中教審大学打倒・全サークル総決起集会」が七号館前で開かれた。

これに応じたのは日部文、同政経、同法、同商の各闘争委および各サークル連合協議会、ベ平連など（加盟サークル数三〇）十五サークルの連名で、学館ロック・アウトに対する抗議文を学長・学生部長宛に提出するとともに、団交要請を近くにいた学生課員に口頭で申し込んだ。

そして午後七時、デモに移り、隊列の一部はそのまま旧学生会館の生協書籍部入口を実力突破し、内部へ乱入した。内に入った学生は三階のテラスから「共連協」「二政闘」の旗をたれ降ろし、アジテーションを始めた。残りの学生は入口前に座り込んで集会を行ない、これを一般学生が取り囲むようにして、約二〇〇人がマロニエ通りにこった返した。

一方、大学当局は「管理導入」をほのめかして大学院から警告を繰り返した。しかしながら、学生は内部に打ちつけられたベニヤ板のバリケードを次々に取り払い、窓を開けたりしながら、新学館へ入っていった。まもなく、新学館の正面入口が内側から開放され、鉄の扉も開け放されると、拍手が巻き起こった。旧学館前で集会を開いていた学生もまもなく新学館前の広場に集まり、再び集会を始めた。

午後九時前に、集会は終了。その後、学生達は本校周辺をデモ行進し、解散した。

学生のこれらの行動に関し、当局は次の告示内容を掲示した。

告示

学生会館の閉鎖については、すでに再三にわたって、「学生会館運営の正常化」（四十四年十二月二十日・四十五年一月二十八日付・四十五年一月二十四日掲示）新入生諸君へ四十五年四月掲示）について全学生諸君のまえに提示していること、学生会館が暴力行動のための拠点、学外者宿泊の場と化することなく全学生諸君の自由な活用の場として自らの責任と規律にもとづく運営がなされるならばすみやかに閉鎖を解きたいという意向に変わりはない。

学生諸君は学生会館の正常化について、大学と話し合いをもつことのできる学生の代表機関を選び、一日も早くすべての学生諸君のためのものとして開館することができるよう努力されることを切望する。

明治大学

神田地区の新・旧学生会館は全学がロック・アウトされるまで、活動家、サークル員の主な活動場所であった。

しかし、授業が再開され、生田および和泉の学館がなし崩し的に学生の手に戻った後も、唯一残された〝学生自治の砦〟であった。大学当局は①一部暴力学生の巣になる②他大学生が泊まり込む——などの理由で、強硬に神田の両学館をシャット・アウトしたままであった。一部には安保が開けばという声もあったが、まだその気配も感じられず、警視庁の許可がなければ開けない、という噂が学生間に強い。

学館にあるサークル等は主に研連所属のものであるが、すでに使用を許可されている記念館地下の〝モグラ横丁〟に同居させてもらったり、今なお喫茶店などを利用している。なお、四号館サークル室も封鎖されたままであり、開館の見通しはまだ立っていない。

こういう状況の中で、六月二十日に開かれた研連会議が、学館実力解除を決議、以上の行動となったものである。